立命館大学

# 日本文学会

ニュース No.44

「論究日本文学」第72号　付録　2000.5

## 日文研究室だより

一九九九年度

会長　伴　利　昭

前年度（一九九八年）の日文研究室だよりに、教学改革の検討が進められつつある様子が紹介され、具体的な改革案の多様な相についても触れられている。本年、次年度においてはいよいよ変革をスタートさせる時がきているようだ。

教学の内容を常に検討し、時代の変化や進歩にも対応して新しい領域を組み入れていくことについては何の異存もないし、追求されるべき望ましい姿だと思うが、ちょっと気になるところがないわけではない。

近年学生数減がとりざたされて久しいが、ここ一、二年はおそろしいようなニュースが聞こえてくる。志願者数が定員の二割に満たない専攻のうわさなどだ。受験生に人気、不人気の分野などについても声高に語られる。不人気の領域は魅力を感じさせるような変革を迫られるというのが昨今の事情だ。学生に人気がないというのは動かしようのない現実で、これにしかるべき対処の方法を探るのは当然のことだ。ただこの圧力は現代の若者に訴えかける力を必要とするため、現代の社会、仕事に直接的に結びつく要素のつよい、わかりやすい変革が求められるといううらみもある。現実の圧力にむやみに流されてしまうと、やがて浮き沈みのにがい思いのもととなろう。

大学に学ばず、社会の現実のなかで自らをたたきあげて大成した人物も世には多い。目前の現実を越えた真理を極めた大人もいる。しかし、現実にとらわれて乗り越えられず狭い視野や独善に陥っている人もよく見かける。日文専攻の学問があまりに現実や功利に就きすぎると大事なものを見失うおそれがある。学問の底流には真理や抽象や哲学が常にあってほしい。すぐに現実に結ぶ点では距離を感じても、無限の変化や現実に対応できるのは抽象をおいて他にはない。長年の学問の伝統や基盤も今では古めかしく見えるものもあるかも知れないが、きっと大事なものを内包しているはずだ。情報機器を用いた文学研究が最近はさかんで、予算をつけて奨励している向きもあるが、一方でこれらの風潮が基礎的研究の軽視を招くおそれがあると警鐘をならす意見もある。時代に就きすぎた改革とならぬよう念じる次第だ。

本年度に和田繁二郎先生がお亡くなりになった。本学の草創期より日文専攻を支え、その伝統を作って来られた先生だけに悲しみも一入だ。前号がその追悼集となっている。